DESIGN GRADUATION WORKS 2019

卒業作品集

会津大学短期大学部 産業情報学科 デザイン情報コース

DESIGN GRADUATION WORKS 2019

ごあいさつ

この「作品集」は、「デザイン情報コース卒業研究発表会」、「卒業研究発表会 研究要旨集」、「卒業展」と、広く一般の方々に公表し、ご批判を仰いでまいりました、会津大学短期大学部産業情報学科デザイン情報コース卒業研究ゼミナールの成果を示す、今年度最後のものです。「作品集」の発行も今年で15回目を迎えました。
産業情報学科では、卒業研究ゼミを必修科目として位置づけ、デザイン情報コースでは1年次の後半からプレゼミとして実施し、2年次より具体的なテーマを設定し、問題解決能力や創造性の研鑽に取り組んでまいりました。その内容はWebデザイン、グラフィックデザイン、漆工芸作品、建築や地域振興、復興支援と様々ですが、いずれも地道な研究を裏付けとした力作です。
今年も具体的な地域の問題をベースとしたテーマが多く見られました。地域の活性化ということでは「あいづまちなかアートプロジェクトのデジタルコンテンツの制作」「金山町におけるシークエンスデザイン提案」「旭三寄を記録し残す」「奥会津に若者を呼び込むデザインツール」「いわなの里のグラフィックツール」などが地域の方々の協力をいただきながら進められ結実しております。その他にも会津の伝統産業である漆工芸の新たな提案作品など、各分野で学んできたことの集大成として見応えのあるものとなりました。
学生諸君にとっては、学生時代の創作への熱意と、活力に満ちた日々の証として、知性と感性を傾け、創造への情熱を持って過ごした時期です。その中で生みだされた作品は、よき思い出になるものと期待しております。
卒業する学生諸君には、この卒業研究ゼミで経験したプロセスと反省を通じて、創造することの喜び、諸問題に挑戦するエネルギー、充実したときを過ごして得た達成感などを糧に、今後の社会生活の中でさらなる飛躍につなげていってほしいと願っています。

最後に、卒業研究および卒業制作にご支援、ご協力をいただきました学内外の関係者のみなさまに深く感謝し、厚く御礼を申し上げます。この作品集は広く学外にも配布してご高覧に供します。忌憚のないご意見、ご批判を賜れば幸甚に存じます。

2019年3月
会津大学短期大学部 産業情報学科
学科長　井波 純

目次

4 あいづまちなかアートプロジェクトのデジタルコンテンツの制作
伊藤 麻衣　及川 里恵　鎌田 侑香
藤澤 美沙　渡邉 ひなの

6 SfMを用いたオブジェクトのデジタル化とコンテンツの提案
県南地方を中心とした狛犬の3Dギャラリー
小山 雄基

7 寮生活でつながる絆
大学学生寮の複合デザイン検討提案
兼田 桃佳

8 みんなで見守る復興住宅
集住型復興住宅研究とコミュニティ誘発デザイン提案
加茂 小春

9 アール・ブリュットと日常がつながる場の提案
アール・ブリュット調査研究と空間デザイン検討
榊 ゆりか

10 伊勢から会津へ・会津染型の継承と活用研究
佐々木 結希子

11 旭三寄を記録し残す
会津美里町旭三寄の景観を後世に残すツールデザインの研究
髙崎 真衣

12 きおくをつなぐ
東日本大震災アーカイブ施設と慰霊の場の研究調査及び提案
早尾 桃香

13 金山町におけるシークエンスデザイン提案
宮崎八景を活用したシークエンスデザイン提案
三浦 尚悟

14 奥会津に若者を呼び込むデザインツール
大関 美咲　宮原 亜由香　渡部 茜

16 野口英世PRプロジェクト
紋間 優　八巻 彩

18 いわなの里のグラフィックツール
石山 蓮

19 会津みそを普及させるグラフィックデザイン
伊藤 雪乃

20 加勢鳥の継承を図るデザイン
菊地 桜子

21 芦ノ牧グランドホテルを若年層に発信する広告
酒井 幸希

22 奥会津博物館の集客力を高めるデザイン
星 美沙

23 会津伝統野菜を守るためのポスター
梁取 陸

24 想いの収納箱
工藤 美咲

25 爬虫類と漆の融合
可能性の追求
今野 桃嘉

26 宝石（ルース／裸石）を入れる漆のケース
高畠 あかり

27 男の料理のための器
中村 昂平

28 色漆を用いた化粧ポーチ
成田 夏菜

29 漆の椅子の制作
横山 美沙樹

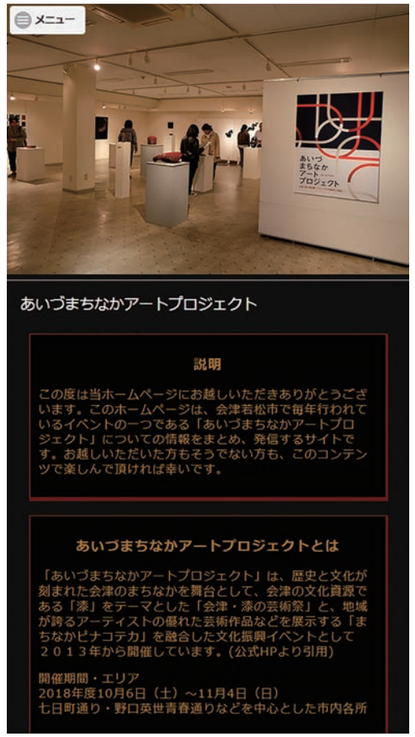
30 卒業研究発表会・卒業展

33 ゼミ紹介

あいづまちなかアートプロジェクトのデジタルコンテンツの制作

伊藤 麻衣　及川 里恵　鎌田 侑香
藤澤 美沙　渡邉 ひなの

あいづまちなかアートプロジェクトは、2013年より会津若松市内で毎年開催されている地域のイベントである。主な参加者層は40代以上で、18歳までの参加者は少ない。そこで、私たちはその取材を行い、それらをまとめたコンテンツを制作した。本研究の目的は、あいづまちなかアートプロジェクトを認知してもらい、参加のきっかけになることである。そのコンテンツとして、WEBサイトと動画を制作した。WEBサイトはレスポンシブ対応でスマートフォン向けにし、また一部では360度画像を加え会場の雰囲気が伝わるようにした。動画は、お椀の木地の作り方の歴史や漆の採取方法を紹介し、漆芸作品が完成するまでを紹介した。インタビュー動画では、まちなかアートプロジェクトには多くの学生が参加していることを発信するため、学生作家に焦点を当てた動画を制作した。



a

b

c

d

a. トップページ
b. 真夏の漆塾のページ（スマートフォン版）
c. Webサイトをスマートフォンで閲覧している様子
d. 福西本店の360度画像

［技法・サイズ］Dreamweaver、Premiere Pro、After Effects
サイト（トップページ）：320×2836pixel
動画：1920×1080pixel

e

f

e. インタビュー動画「うるしとわたし～制作学生の声～」
f. 素材動画「一本の丸太からお椀ができるまで」

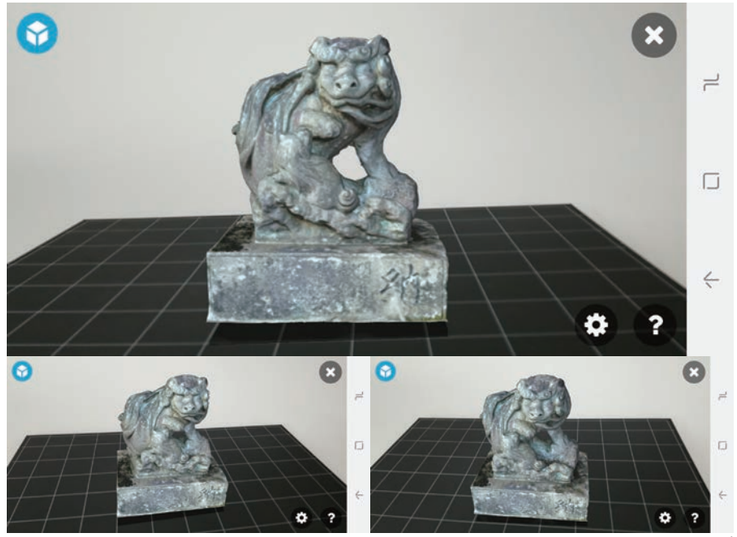
SfMを用いたオブジェクトのデジタル化とコンテンツの提案

県南地方を中心とした狛犬の3Dギャラリー

小山 雄基

Structure from Motion（SfM）とは連続した写真の中から３次元の点群データを得る手段である。白河市を中心とした県南地方には石工である小松寅吉、小林和平らが制作した特徴的な狛犬の石彫が多数存在する。本研究では、その狛犬たちの３次元デジタルデータを作成し、完成したものをWeb上に公開し、閲覧や保存、伝承を目的とする。３Dモデルの作成はAgisoft Photoscanというソフトで作成した。SfMによって作成された3Dモデルは形状や質感を詳細に確認できる。そのため、修復の際に基礎データとして活用できる。完成した3Dモデルは3Dビュワーサイトである SketchFabに公開する。このサイトでは対応したデバイスがあればAR、VRで3Dモデルの閲覧とダウンロードが可能になる。公開した3Dモデルをまとめるサイトを作成し、個別のページに作者や所在地などの詳細データ、埋め込まれた3Dモデルを掲載した。

a　b



d

c

a. 白河狛犬ギャラリーサイト トップページ　b. 白河狛犬ギャラリーサイト 個別ページ（川田神社）
c. Web上に表示された狛犬の３Dモデル　d. スマートフォンのARアプリで狛犬の３Dモデルを表示している様子

［サイズ］Webサイト：320×2836pixel

寮生活でつながる絆

大学学生寮の複合デザイン検討提案

兼田 桃佳

会津大学短期大学部の学生寮である一箕寮は築52年を過ぎ老朽化が進んでおり、現在建て替えを検討している。鉄筋コンクリート造ではあるが、湿気がたまりやすい構造となっており、カビや虫の侵入等に悩まされている。また、敷地は狭隘な私道による接道となっており、現行の建築基準法の接道条件を満たしておらず下水道の接続もできないため敷地内に浄化槽を設置し費用をかけて維持している状況である。一箕寮では共に生活をした学生が親友となり、卒業後も何度も会うような仲になったという話を聞く。共用スペースを豊かにすることでコミュニケーションの場となり、自然と協働性が身につけられることが考えられる。共用スペースを所々に設けることによってコミュニケーションの場が点在し、あらゆる場所で学生たちの絆が生まれ、充実した学生生活ができると考えた。

a

b

c

a. 全体模型（外観）　b. 拡大模型（居室）　c. 拡大模型（小さな共用スペース）

［素材・サイズ］全体模型：スチレンボード、バルサ材、角材、カスミ草　60×40×15cm
拡大模型：スチレンボード、バルサ材、角材　38×22×25cm

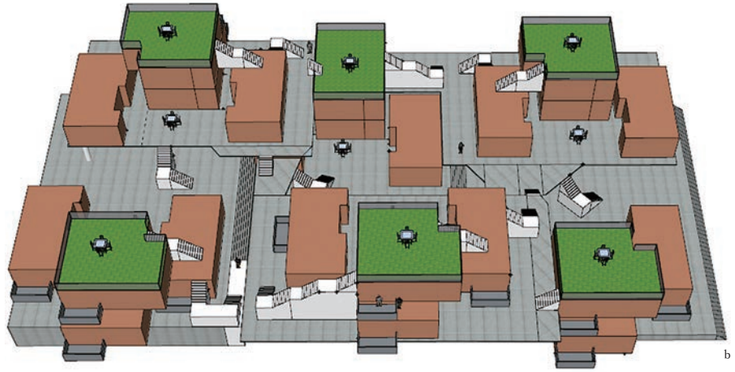
みんなで見守る復興住宅

集住型復興住宅研究とコミュニティ誘発デザイン提案

加茂 小春

高齢化社会の現在、復興住宅で一人暮らしの高齢者による孤独死などの社会問題が起きている。現在、日本は総人口のうち65歳以上の高齢者は27%だと言われている。その割合は年々増加しており、このようなことは、決して避けることができない問題となっている。そのような問題を解決できる見守りが可能な集合住宅を提案出来ないかと考えた。県内の復興住宅に出向き現地調査を行い、問題点を分析し、自然に見守りができるようなデザイン提案を行った。住戸の扉を向かい合わせることでお互いの出入りが把握でき、さらに共用廊下から見守りをすることが可能なデザインを検討した。4戸ずつにまとめ、それを6つにグルーピングして、その高さをそれぞれ変えてデザインした。あえて高さを揃えないことで、自然に周囲を見渡せるようにした。

a



b

c

a. 全体模型　b. CGによる全体図　c. 屋上庭園と共用廊下

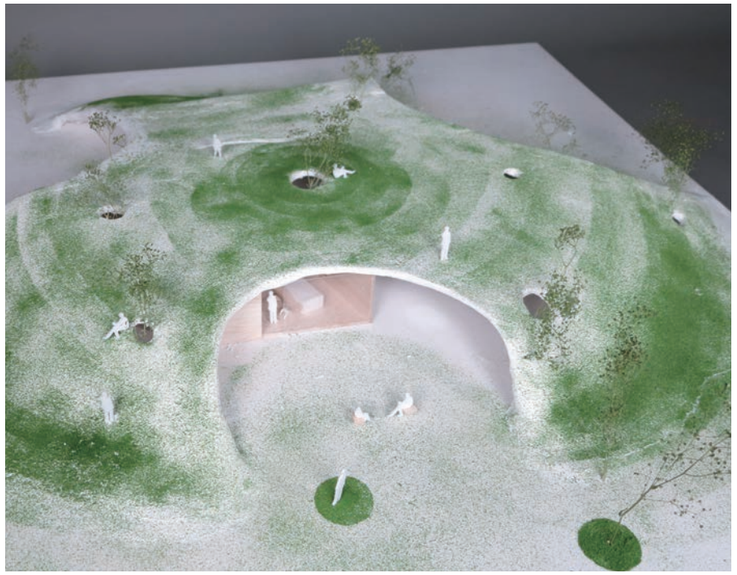
［素材・サイズ］全体模型：スチレンボード、バルサ材、シーナリーパウダー、カスミ草　15×33.5×7cm
拡大模型：スチレンボード、バルサ材　15×29.5×3.5cm

アール・ブリュットと日常がつながる場の提案

アール・ブリュット調査研究と空間デザイン検討

榊 ゆりか

アール・ブリュットとは、人間の内面を絵画や造形によって表現したものである。表現者の生活行為が形となったもので、且つ衝動的に行われる。現在、アール・ブリュットが広まる場として、主に美術館での展示という形態がとられている。しかし、表現行為が切り離されてしまうため、伝わりづらいという現状が調査を通して明らかとなった。本研究では、アール・ブリュットの表現者である三瓶沙弥香さんに向き合うことでアール・ブリュットの場を考えていった。三瓶さんにとって馴染み深い五百淵公園の中で、そこに訪れた人と三瓶さんとの間につながりが生まれることを目的とし、日常の中でアール・ブリュットを垣間見ることの出来る場を検討した。本提案を通して、物事の本質を考えることが大切だと学んだ。これからも継続的に研究を続けていきたいと考える。



a

b

c

a. 上から見た模型　b. 横から見た模型　c. 屋上

［素材・サイズ］スチレンペーパー、モデリングペースト、紙粘土、シーナリーパウダー、バルサ材、カスミ草
92×92×7.8cm

伊勢から会津へ・
会津染型の継承と活用研究

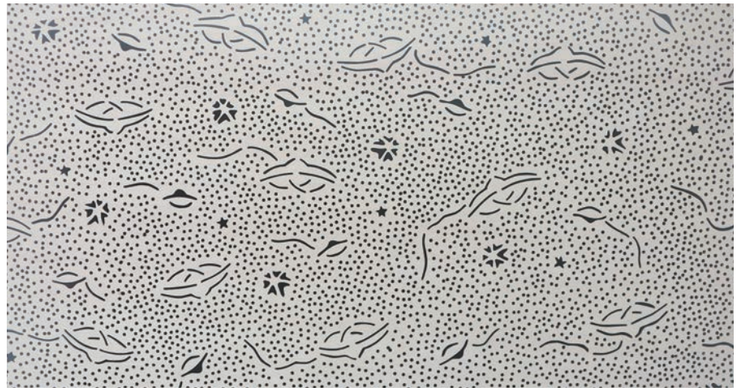
佐々木 結希子

会津染型とは江戸時代から昭和初期まで小野寺家五代にわたり製作販売され、東北地方に広がり多くの人気を得た染型紙である。小野寺家がある喜多方市は、伊勢白子・京都・江戸と並ぶ染型紙の産地であり、小野寺家から喜多方市へ寄贈された染型紙や道具類、約3700点は福島県の県重要文化財に指定された。文献調査を進める中で、会津染型は伊勢型紙から変化したものであることが分かった。変化の中で会津の地域性や文化を取り入れていったと考えられるため、この研究は伊勢型紙と比較しつつ行っていった。本研究では会津型の継承・普及をすることを目的とし、会津染型を現代に合わせた形でデザインした照明器具、吸音壁、建具を制作した。これらのデザインは、現代における型紙の新たな可能性を知ってもらい、会津染型の継承に繋がってほしいと考え提案した。

a

b

c



d

a. 照明器具　b. 照明器具（点灯時）　c. 建具　d. 吸音壁

［素材・サイズ］照明器具：和紙、木材　10×10×35.5cm　建具：MDF　45×91cm
吸音壁：合板　66×90cm

旭三寄を記録し残す

会津美里町旭三寄の景観を後世に残す ツールデザインの研究

髙崎 真衣

旭三寄はいわゆる限界集落と呼ばれる地域であり、年々人口の減少が見受けられる。本研究では限界集落となった自身が住むこの地域の特徴的な町並みに着目し、それらの記録保存ができないかと考えた。記録保存を目的とするにあたり、まず文献調査からこの地域にはかつて何があり、どのような変遷を経て今に至ったのかを調査し、次に実測調査を行い、エレベーション図を作成した。着彩、背景描写を施し、調査した歴史や特徴を記した町並み図を絵巻風に作成、また、ジオラマ模型を制作した。ジオラマ模型には、町並み図のルートが俯瞰的にわかるよう工夫した。これにより、絵巻と見比べながら旭三寄全体の記録が把握できると考えた。また、ジオラマ模型に住人が思い出を記した旗を立てることで、歴史と思い出を記憶として保存し、後世に伝えることを試みた。

a

b

c

a. 町並み図（絵巻風）　b. 三寄のかつての面影を残す造り酒屋　c. ジオラマ模型

［素材・サイズ］町並み図：和紙、木材　30×570cm
ジオラマ模型：スチレンボード、スタイロブロック、カスミ草、プリントシール紙、塩ビシート　60.5×81cm

きおくをつなぐ

東日本大震災アーカイブ施設と慰霊の場の研究調査及び提案

早尾 桃香

東日本大震災からもうすぐ８年が経過しようとしている。福島県では震災の記憶を後世に伝えようとアーカイブ施設や慰霊の場の設置が進められている。しかし、内容は市町村全体のものが多く、被災者一人ひとりの経験談に寄り添った内容や施設は極めて少ない。そのため、後世に残す方法が口承のみになることが想定される。そこで本研究はアーカイブ施設を移動式にし、震災の記憶を保存・伝達する提案とした。設置場所は、仮設住宅を設置した運動公園等、また中高生に震災の記憶を伝えるため学校の校庭をアーカイブの場とした。施設は、蛇腹式膜構造を生かした仮設の建物とコンテナの使用により、運搬や搬入出の作業を容易にした。また、アーカイブ展示の過程で植樹し、その場所で暮らした人や仮設住宅、そして震災のアーカイブへの慰霊を提案した。

a

b

c

a. 全体模型　b. 建物のつながり　c. 拡大模型（つなげた様子）

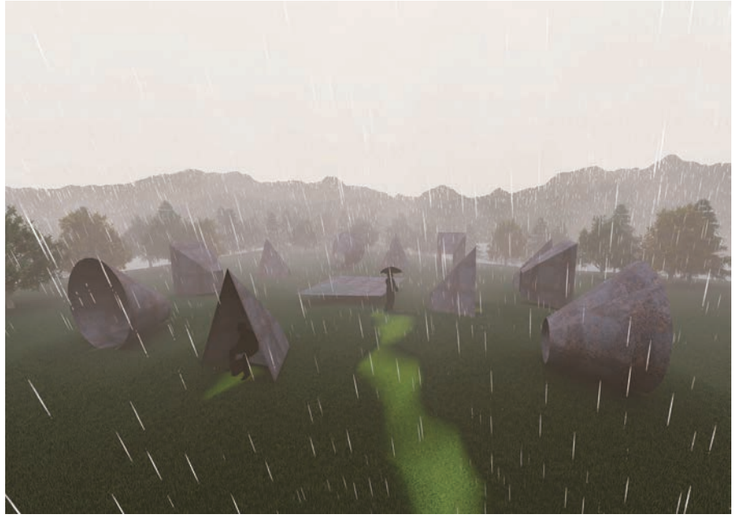
［素材・サイズ］全体模型：スチレンボード、ストッキング、ケント紙、針金　100 × 60 × 20cm
拡大模型：スチレンボード、ストッキング、竹ひご、バルサ板　70 × 70 × 25cm

金山町におけるシークエンスデザイン提案

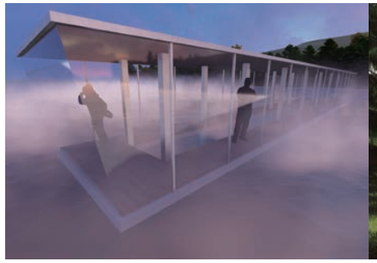
宮崎八景を活用したシークエンスデザイン提案

三浦 尚悟

福島県大沼郡にある金山町は高齢化率が全国でワースト５位になっており、町の58％が高齢者の限界集落となっている。しかし、金山町には日本の里100選に選ばれた宮崎集落や只見線、ヒメマスの遡上など、人を引き付ける潜在的魅力を持っている。本研究では、金山町の潜在的魅力を抽出し、それらを眺めるためのview pointと対象をデザインしシークエンス形成を図る。シークエンス形成の図り方としては宮崎集落にある宮崎八景を活用してデザインを行おうと考えた。View pointと対象のデザインとしては金山町の八景以外の魅力も伝わるようにデザインを行った。また、八景を活用したシークエンスデザイン提案を行うことで全国に400以上ある八景をどのように活用するかのプロトタイプを提示することができ、観光資源の少ない地域の町おこしの可能性を広げるきっかけとなった。



a



b

c

d

e

a. 宮崎八景「古城夜雨」を造形化
b. 宮崎八景「只見川関根渡船・法師青嵐」を造形化
c. 宮崎八景「瀧谷寺晩鐘」を造形化
d. 魚道view pointベンチ
e. ベンチから魚道を眺める様子

［素材・サイズ］
魚道view pointベンチ：スギ材　201 × 192 × 85cm

奥会津に若者を呼び込むデザインツール

大関 美咲　宮原 亜由香　渡部 茜

奥会津地域はシンボルであるJR只見線をはじめ、豊かな自然や名所の数々など魅力ある観光資源を充分に秘めているが、少子高齢化や交通手段の不足などの問題を抱えている。しかし、一部不通となっているJR只見線が2021年度に完全復旧することが決まり、奥会津地域にとって明るい兆しが見えている。そこで、本研究では奥会津に若者を呼び込むデザインツールを制作しようと考えた。ファンが多いJR只見線をモチーフに、路線バスのラッピングデザインや若者向けのスマホカバーを制作した。また、実際に奥会津に訪れJR只見線や奥会津について理解してもらうため、大学生を主な対象に想定した奥会津金山町のパンフレットを制作した。これらのツールを制作することで奥会津に若者を呼び込むことができ、奥会津の活性化・発展に繋げることができることを期待する。

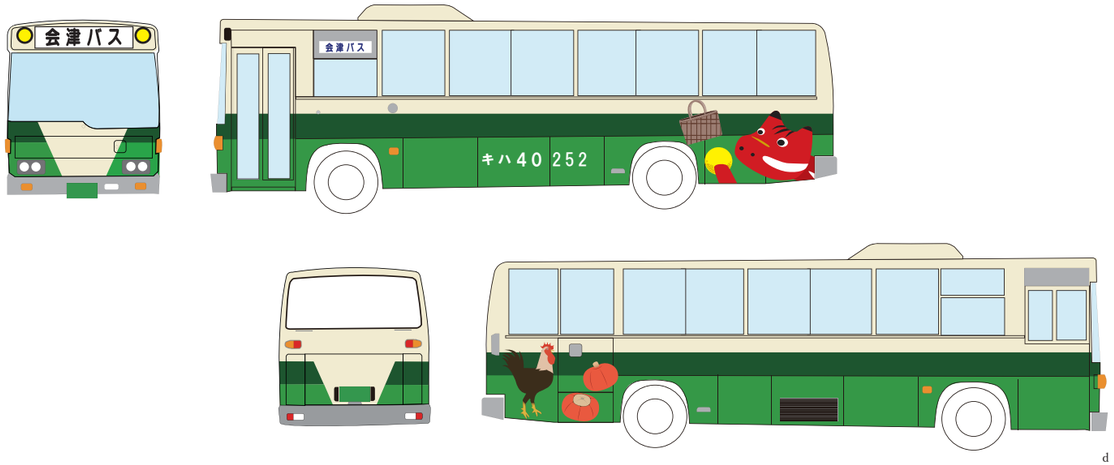
a

b

c

a. マップ　b. スマホカバー　c. 交流施設のロゴ　d. 路線バスのラッピングデザイン　e. 実際に運行されているバス

［素材・サイズ］マップ：紙　42 × 29.7cm　スマホカバー：ソフトレザー　15.1 × 8.5 × 1.5cm
ラッピングバス：ラッピングシート　900 × 250 × 350cm



d

e

野口英世PRプロジェクト

紋間 優　八巻 彩

平成30年は、会津の偉人・野口英世の没後90周年である。しかし、アンケートを実施した結果、ほとんどの人がその事実を認知していないことがわかった。そこで私たちは、この節目の年をきっかけに、野口英世記念館をPRするためのグラフィックツールを制作しようと考えた。若年層の来館を増やしたいという希望を聞き、ターゲットを若者に狙いデザインすることにした。現代の若者の生活環境を考慮し、SNSを通して拡散されることを狙ってトリックアートを制作した。ある場所から撮影すると立体的に見え、非現実的な空間として記念撮影ができる。また、記念館のキャラクター・ヒディの着ぐるみを用いたポスターも制作した。野口英世のひげをモチーフにした栞も制作し、記念館受付で「ポスターを見た」と申告した方に栞をプレゼントするという流れになっている。

a

初恋の地、照れちゃうなあ。
ヒディ
会津若松市
若松栄町教会
野口英世は3歳の時に洗礼を受けたキリスト教会です。会場内は、ヒディ自身が、ヒディ自身が、ヒディ自身が

いわなの里のグラフィックツール

石山 蓮

福島県只見町にある「いわなの里」は、2010年までは来場者数が月約3000人だったが、2011年7月に新潟・福島豪雨の被害を受け、月約1000人まで減少してしまった。原因として、営業を再開していることがあまり認知されていないことに加え、客層の大半を占める釣り好きの家族やライダーに、他の釣り堀にはない魅力が伝えきれず、新規の来場者があまり獲得できていないことが挙げられる。そこで本研究では来場者数が増えるよう、ロゴ・ポスター・パンフレット・イワナの唐揚げ用パッケージ・ステッカーの５つを制作し、只見の美しい自然や、いわなの里で楽しんでいる来場者の様子を発信するグラフィックツールを提案した。青や緑といった自然を感じられる配色や、いわなの里で釣りを楽しんでいる人たちの写真を用いることで、美しい自然やいわなの里の活気を表した。

a

b

d

いわなの里

c

a. ポスター　b. ポスター　c. ロゴ　d. パンフレット、イワナの唐揚げ用パッケージ、ステッカー

［素材・サイズ］ポスター：紙　72.8×51.5cm　全５点　パンフレット：紙（表紙サイズ）21×10cm（展開サイズ）21×29.7cm
パッケージ：ボール紙　23×17×10cm　ステッカー：塩化ビニル　7.4×6.3cm、7.2×6cm、14.3×2cm、9.2×4.4cm

会津みそを普及させる グラフィックデザイン

伊藤 雪乃

平成20年に会津味噌協同組合の地域団体商標として登録された会津みそは、昔から会津地域で造られ、人々に親しまれてきた。しかし、調査の結果、一部の醸造店の名前は知っているが、会津みそという名称には馴染みがないといった問題点が挙がった。この問題を解決するために、会津みその知名度の向上を図るツールの制作を行った。ポスターで会津みそを人々に認知してもらい、パンフレットでは会津みその概要や各醸造店の紹介をして理解を深めてもらう。商品ラベル（カップタイプ15点・袋タイプ15点）では、墨の濃淡で味噌の辛さと甘さを、墨のにじみ具合で食感の違いを表した。さらに各醸造店の味噌造りのこだわりを会津の自然や風土と交えて表現した。全ツールを通して、会津みそのイメージを伝えることと各醸造店の特色が伝わることの双方が成り立つようにした。

a

b

c

a. 15店舗の商品ラベル（カップタイプ）　b. パンフレット　c. ポスター（各醸造店のおすすめの味噌汁紹介）

［素材・サイズ］商品ラベル：和紙　11×16cm　パンフレット：紙　21×14.8cm
ポスター：紙　72.8×51.5cm　全３点

加勢鳥の継承を図るデザイン

菊地 桜子

加勢鳥とは山形県上山市に江戸時代初期から伝わる、藁で編まれたケンダイを身にまとった人々に水をかけ、五穀豊穣や商売繁盛などを祈願する民族行事である。現在は全国からの参加者も増加しており、活性化が図られている。主催者側は、加勢鳥を更に盛り上げ歴史と伝統を後世に残していきたいと話しているが、地元の若者からの認知度が低いために参加者数が少ないことが問題とされている。また、現在の広報物には加勢鳥を次世代へ発信していく内容があまり含まれていないことも問題である。そこで、これらの問題を解決するための広報ツールを制作した。加勢鳥の特徴である独特な形状が前面に出るよう写真の切り抜きやシルエット、イラストレーションを用いた紙面構成にすることで、これまでの広報ツールが伝えてきたイメージを一新させた。

a

b

c

d

a. ポスター　b. フライヤー　c. のぼり　d. 折りパンフレット（一般向け）、綴じパンフレット（小学生向け）

［素材・サイズ］ポスター：紙　72.8×51.5cm　フライヤー：紙　29.7×21cm　のぼり：布　180×60cm
折りパンフレット：クラフト紙（表紙サイズ）14.8×10.5cm（展開サイズ）29.7×21cm　綴じパンフレット：紙　29.7×21cm

芦ノ牧グランドホテルを若年層に発信する広告

酒井 幸希

芦ノ牧グランドホテルは福島県会津若松市の南に位置し、料理自慢の宿として知られている。県内外から多くの客が訪れ、特に地元客から長年愛され続けている。しかし、利用客は地元の年配客や団体客が半数を占めており、若年層にも訪れてほしいという要望がホテル側からあった。そこで、本研究では若年層をターゲットとした広告を提案する。若者に好まれている色彩を用いて芦ノ牧の風景、お湯や湯気の揺らめきを曲線で表現した。また、人物の素材は笑顔を際立たせるため一色で表現した。他のホテルではあまり見られないデザインを選択することで、若者の目を引きつけたいと考える。興味関心を持ってもらい、楽しそう、訪れてみたいと思えるようなデザイン制作を行い、芦ノ牧グランドホテルのイメージを保ちながら若者が訪れやすいデザイン提案を目指した。

a

b

a. ポスター
b. ポスター
c. パンフレット

［素材・サイズ］
ポスター：紙　72.8×51.5cm　全10点
パンフレット：紙　（表紙サイズ）21×7cm
（展開サイズ）21×56cm

c

奥会津博物館の集客力を高めるデザイン

星 美沙

奥会津博物館は、失われつつある奥会津の伝統文化を保存・伝承することを目的としている。現在、来館者数が全盛期の半数以下になってしまい、回復しないことが問題となっている。そこで、本研究では来館者数増加を目的としたグラフィックツールの制作を行った。ロゴは、博物館を県内外に広く認知させるため、主な展示である木地師・藍染の要素を取り入れた。広報物は、ロゴをもとに館内のイメージや南会津町の文化を伝承できるものを目指した。学習ツールは、歴史を学ぶことができ、博物館を通して小学生が地域に興味を持つものを制作した。全体的に奥会津博物館を連想させる木地師・藍染・芸能をイメージした３色や木の削り跡をモチーフとした形を使用している。本研究で制作したツールをきっかけに、奥会津博物館に親しみをもってもらうことを目指した。

a

b

奥会津
博物館
c

d

a. ポスター（テーマ展示：山） b. ポスター（テーマ展示：道） c. ロゴ d. パンフレット、学習ツール、チケット

［素材・サイズ］ポスター：紙 72.8×51.5cm 全５点 パンフレット：紙 （表紙サイズ）21×10cm （展開サイズ）21×29.7cm
学習ツール：紙 25.7×18.2cm チケット：紙 6×15.5cm

会津伝統野菜を守るためのポスター

梁取 陸

会津には、古くから親しまれ栽培されてきた会津伝統野菜と呼ばれるものがある。それらは長い年月をかけて会津の土地に根付いてきたものだ。しかし味や形が安定しないため、大量生産には向かず、時代が経つにつれて栽培されなくなってしまった。このままでは種が途絶えてしまうため、もっと多くの人に会津伝統野菜について知ってもらう必要があると感じた。そのため本研究では現在栽培されている会津伝統野菜18種類を発信するためのポスターを制作した。ポスターには透明水彩で描いた野菜のイラストを用いることで、伝統野菜が持つ素朴さや瑞々しさを表現した。ポスター全体の構成としてメインの野菜が活きるように、背景色はそれぞれの旬の季節を示す伝統色を使用した。野菜を表したパターンや野菜の配置はそれぞれの個性的な形状が際立つよう心掛けた。

a

b

c

d

a. 荒久田茎立
b. 立川牛蒡
c. かおり枝豆
d. 会津小菊かぼちゃ

［素材・サイズ］
紙
72.8×51.5cm
全20点

想いの収納箱

工藤 美咲

人それぞれが持つ「想う」という能力にスポットを当てた。心理学の講義で見た映画「ストロベリーショートケイクス」や研修先で見た厨子の作品は、自身の「想い」を収める箱を提案するためのきっかけとなった。この「想い」は自分自身の周りを漂っているが実際に見ることはできない。そのためにこの箱へ自身の「想い」を収めることで「隔たりのない美しさ」を解き放つ。そして「想い」を収めた自分自身は、自身を振り返ることで自分を知り、相手を思いやることができる。デザインは、直観的な思いが自身の想いに変化すると考え、内部のみに装飾を施し、想いを優しく包み込む役割をもたらしている。見えないものの存在は、私たちの生きていく過程で様々な影響を与える。「想い」が自身にもたらすものはどのようなものであるのか、自分自身で想ってほしい。

a

b

c

a. 内部の様子　b. 扉を開いた状態　c. 扉を閉じた状態

［素材・技法・サイズ］木材、漆、ガラス、卵殻、銀粉　螺鈿、蒔絵、漆絵
（扉を閉じた状態）20×36×29.8cm（扉を開いた状態）20×88.5×29.8cm

爬虫類と漆の融合

可能性の追求

今野 桃嘉

私は以前ペットショップでアルバイトをしていた際、爬虫類の飼育用ケージが他動物のケージに比べ種類が少ないことに気づいた。そういったことから、木製ケージを自作する人や業者に注文する人が増えているという現状を知った。しかし、素地の木は雑菌が繁殖しやすいうえ、腐りやすい。一方漆は、塗った物を腐りにくくする防腐の作用があり、また抗菌作用もある。木材と漆を組み合わせれば、木材の欠点を補った新しい形のケージを制作できるのではないかと考え、今回の研究を始めるに至った。内側を木地呂漆という木目を残す茶色の漆で塗ることによりどんな爬虫類にも映えるよう工夫した。また、爬虫類らしさを表現するためケージの角にだけ麻布を貼り、朱と黒を塗り重ね、研ぎ出すことでまだら模様を表し、全面枠中央には長寿を表す唐草模様を施した。

a

b

c

a. 飼育ケージ前面　b. 金網の蓋を外し、引き戸を開けた状態　c. 右上部の唐草紋様

［素材・技法・サイズ］木材（ブナ、合板）、漆、麻布、金消粉、アクリル板、金網
黒呂色塗、木地呂塗、消金蒔絵、漆絵　69×44×33.1cm

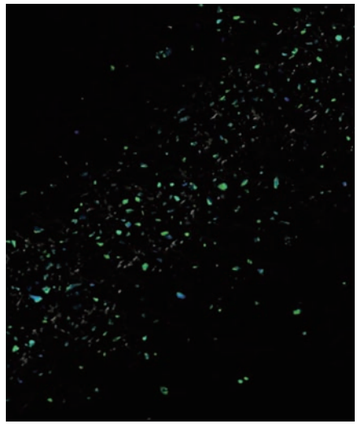
宝石（ルース／裸石）を入れる漆のケース

高畠 あかり

枠に留められていないカットされた石を「ルース」といい、それらを収納する箱をルースケースという。私は、箱やケースが重要なものであると考えている。なぜなら、パッと見たときに一番に目に入り、そのデザインだけで中身の印象も変わることがあるからである。しかし販売されているルースケースは、プラスチック製のものや、高価であっても箱そのものに魅力を感じないものが多かった。そこで、ルースの魅力を伝えるため、黒漆と蒔絵を用いたケースを制作したいと考えた。構造は、ルースを入れる本体に、窓付きの中蓋と装飾を施した上蓋がある形となっている。蓋をしていてもルースを見ることができるよう、透明なガラス窓を中蓋に設けた。また、上蓋の装飾にはフレークタイプの京都オパールを用い、宇宙空間や天の川をイメージしたデザインとした。

a

b



c

a. 上蓋を閉じた状態のルースケース　b. 上蓋を開けた状態のルースケース　c. 上蓋の螺鈿（京都オパール）

［素材・技法・サイズ］木材、漆　螺鈿（本来用いる貝殻の代わりに京都オパールを使用）
21×30×7cm

男の料理のための器

中村 昂平

小さい頃から料理に興味をもっていた私は、実家暮らしの頃からよく料理を作っていた。最近は、男性が料理する割合が増加傾向にあり、男性の料理に合う器があってもよいのではないかと考えた。研究を進めていく中で私は、へぎ板という素材に出会った。へぎ板は、木の繊維を壊さずに、削らずに手で割って作られる板だ。へぎ板の割ったときの板目のギザギザした荒々しい表情が男性の料理に合うのではないかと思った。木、本来の姿を生かしつつ料理を盛ったときの彩りも重要だと感じたので、へぎ板に色漆を塗り重ね色を出そうと考えた。色は、大皿が朱、中皿が緑と白とした。今回の卒業研究では、男性の料理や器に対する見方を変え、更に男性が料理する機会を増やす事ができる皿を制作し、家庭だけでなく、料理店やホテル、店舗等で使用できる皿を提案した。

a

b

c

a. 中皿に料理を盛り付けた様子　b. 大皿（朱）、中皿（白）、中皿（緑）　c. 大皿（朱）部分拡大

［素材・技法・サイズ］木材、麻布、漆　変り塗
大皿（朱）：28×58×6.5cm　中皿（白）：14.2×57.5×3.6cm　中皿（緑）：16×57.5×3.2cm

色漆を用いた化粧ポーチ

成田 夏菜

女性にとって化粧は、日常的であり、おしゃれとしての楽しみや社会人にとっての身だしなみとして大切なものだ。始まりは原始時代だとされ、化粧道具として見つかっている最も古いものは、縄文時代の漆塗りの櫛である。古くから結びつきのあった化粧道具と漆だが、現代は生活様式の変化から昔とは全く異なるものに変わってきた。そのため、女性が漆塗りの化粧道具を使用するところはほとんど見られない。現代の生活様式を踏まえ、若い世代にも漆工芸に目を向けてもらうことを意識し、色漆を用いた化粧ポーチを5つ制作した。形が同じであっても色によってそのものの感じ方は人それぞれだ。その日の気分・服装に合わせたものを選べるようにした。ポーチのデザインとしては、紙風船やお手玉のような形を意識し、持ち運べる大きさになるよう制作した。

a

b

a. 5色の化粧ポーチ
b. 化粧品を入れた状態

［素材・技法・サイズ］
綿布、漆
乾漆技法、色漆塗
朱：8 × 11.5 × 9.5cm
黒：7 × 10 × 7.5cm
牡丹：8 × 10.5 × 9.5cm
瑠璃：8 × 10.5 × 9.3cm
草：8 × 12.5 × 8.5cm

漆の椅子の制作

横山 美沙樹

明治期以降、日本では西洋文化の影響から、椅子を中心とした生活様式が広がり、和箪笥や飾棚などの漆調度品は次第に姿を消していった。また、現代では大量生産によって安く簡単に家具を購入できるようになり、粗大ごみの増加や不法投棄の原因となっている。この漆家具の減少と家具の廃棄問題に対し、現代生活に欠かせない椅子に漆を用いることで一生使える椅子を制作し、問題に対する提案を行いたいと考えた。本研究では、「人と共に成長する椅子」をテーマとし、生活の合間に読書や音楽といった趣味を楽しみながらほっと一息つける椅子を制作した。この作品は生活の様々な場面で使えるように木目を見せたシンプルなデザインを目指し、強度を保ちつつ各部品の軽量化に努めた。本研究を通じて、日常生活における漆家具の提案と認知につながって欲しいと思う。

a

b

c

a. 椅子上部　b. 座面と背もたれの加飾　c. 椅子側面

［素材・技法・サイズ］木材（ブナ）、漆、金箔　木地呂塗
46 × 55 × 82cm

DM デザイン｜酒井 幸希

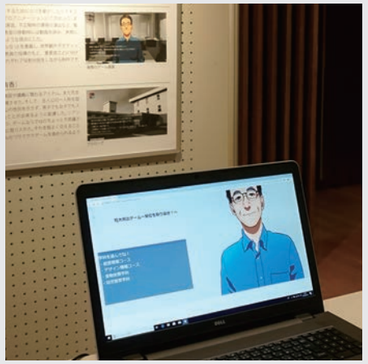
Design Graduation Works 2019

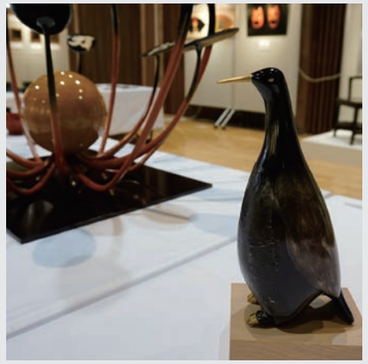
卒業研究発表会

2019年1月26日（土）・27日（日）　会津大学短期大学部310教室

卒業展

2019年2月14日（木）－16日（土）　会津若松市生涯学習総合センター 會津稽古堂





ゼミ紹介

2018年度卒業生がデザイン情報コースの５つのゼミを紹介します。ゼミの特性や学べること、２年間のゼミ活動における指導教員やゼミ生との思い出を中心にまとめました。

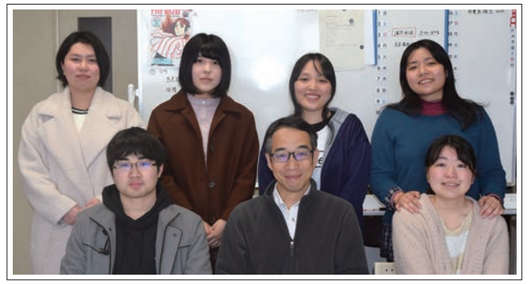
インターフェース　｜横尾ゼミ｜

電子と人間をつなぐゼミ

インターフェースゼミではWebサイトのデザインやそのコンテンツを制作する技術を学ぶ事ができます。ネット上のコンテンツには様々なものがありますが、例えば仮想空間上で見せる３Dモデルの制作やドローン撮影による映像制作、また動画の編集やアニメーション制作の基本なども学べます。インターフェースゼミは自由度が高く、自分がやりたい事や興味を持った事に全力で打ち込む事ができます。Webサイト制作以外にも様々なスキルを身につけたい人や、幅広いデジタルコンテンツを学びたい人にぴったりのゼミです。

恒久的平和ゼミ

ゼミの実習では短大脱出ゲームを制作するため、他学科の学生への調査や教員へのインタビューを行いました。私たちが人見知りのためなかなか話しかけられずに時間がかかりました。また、初めてドローンに触れたりイラスト制作ソフトで立ち絵を制作したりするなど、最先端の技術に触れる良い機会になりました。さらに、卒業研究に向けてあいづまちなかアートプロジェクトの会場をみんなで回りました。食事をしたり、綺麗な建物に心を弾ませたりと、自分たちの知らなかった会津の魅力を改めて知ることができました。



インテリア　｜柴﨑ゼミ｜

成長した２年間

インテリアゼミでは住宅・ギャラリー等の設計、地域プロジェクトなど、インテリアから地域おこしまで幅広く学びます。設計課題では平面図・断面図・立面図を描くこと、模型の制作は必須であり、その他にも表現方法としてCGやイラストを用いプレゼンを行います。課題や必修科目が多くスケジュールを立て計画的に進めることが重要です。課題は個人活動が多いため自分との戦いとなり、くじけそうになることが多々ありますが、その分得るものは多く、強い精神力、表現力、プレゼン力、行動力、社会性などが身に付きます。

友よ、恩師よ、学舎よ

ゼミでは現地調査として色々な場所に行きました。実習では新潟の博物館や新国立美術館に行ったり、卒業研究では金山町に合宿したり、それぞれの卒業研究の調査に行ったりしました。初めて行く場所が多く、とても楽しかったうえに、先生の解説も聞けて勉強になりました。また、課題が大変だったこともいい思い出だと感じています。インテリアゼミ一同で励ましあい、強い絆が生まれました。卒業するころには全員親友です。柴﨑先生はとても面白く、指導熱心で優しいので、みんな柴﨑先生が大好きになりました。

グラフィック　｜高橋ゼミ｜

高めあうゼミ

グラフィック分野では、広告・出版・印刷に関連する業界で将来活躍できる人材の育成を目標にしています。実習やゼミの授業では、ポスター、ロゴマークなどのグラフィック作品やパンフレットの編集制作などを実際に作りながら学んでいます。グラフィック高橋ゼミは特に、外部とのコミュニケーションをとりながら制作していく特徴があります。実際にデザインした制作物を学外の方にも見ていただく機会があり達成感を味わえます。また、グループ活動が多いため協調性や団結力が高まり、社会でも役立つ知識が身につくゼミです。

お出かけゼミ

グラフィック高橋ゼミは別名「お出かけゼミ」といわれ、色々な場所に取材・調査に行く機会がたくさんあります。奥会津で豊かな自然を満喫したり、東京の美術大学の作品展を見学したり、楽しみながら学べます。ゼミの先生である高橋延昌先生はとても穏やかなみんなのパパで、ゼミ生の二十歳の誕生日を盛大に祝ってくれます。また、四季折々のイベントを大切にされていて、それにまつわるエピソードを教えてくれます。グループでの活動が主なため、互いに協力し合い、様々な能力を高めあいながら成長できるゼミです。

グラフィック　｜北本ゼミ｜

ド根性北本ゼミ

北本ゼミは、グラフィックデザインの構成要素である文字と図を効果的に組み合わせ、印刷物をデザインしていきます。実習や卒業研究ゼミではポスター・ロゴ・パンフレットなどの様々な媒体を制作しており、２年間で取り組む作品数も非常に多いです。ゼミ生一人一人がお互いを高め合い、切磋琢磨しています。卒業研究では自分で決めたテーマに沿って取材から制作まで個人で進めていきます。心が折れそうになることもありますが、自分で決めたことを最後まで諦めずにやり通す事のできる私たちの根性は誰にも負けません。

キタモトガク習塾

北本ゼミは課題が多く厳しいゼミと言われています。１つ１つの作品と向き合う時間も長いです。その分北本先生は常にゼミ生と向き合い、まるでお父さんのように時に厳しく時に優しく指導してくれます。私たちの雑談に付き合ってくれたり、卒業研究では一人一人が納得のいく作品を完成させるため夜間も学校に残って指導してくれたりと私たちに寄り添ってくれる先生です。そんな学生思いの先生の下で学ぶ私たちは、先生のことを心から慕っています。卒業後もキタモト先生の存在は私たちの力のミナモトとなるでしょう。

クラフト　｜井波ゼミ｜

漆を学ぶとは

クラフトゼミは、漆を専門に学ぶゼミです。初めに２年間使用していく箆などを制作していきます。そして漆の基礎的な知識・技術を学び作品制作に取り組みます。２年生になると、学んだことを生かして自身の作品を制作していきます。漆工芸は、多くの工程を踏み長い時間をかけることで漆の良さを引き立たせます。そのため、辛抱強く取り組んでいかなければなりませんが、完成した時の喜びはクラフトゼミだからこその充実感があります。また、ゼミ仲間と時間を共有し作品を制作していくことで心身ともに成長させてくれます。

２年間を振り返って

漆を学べることに胸弾ませた私たちは、漆が持つ魅力や多くの知識・技法に圧倒されました。初めて漆にかぶれた時は、自然の力強さを感じました。そして、作業が進むにつれ漆工芸の大変さや楽しさを経験することができました。また、作品の背景や目的などの土台を固めることでより作品に磨きがかかることを学びました。失敗も多かったですが作業の教訓となり、たくさんの作品を生み出すことができました。お互いが教え合い、理解し合ったことは明日を生きる上で大切な糧となり、私たちの背中を押してくれると思います。

卒業作品集
DESIGN GRADUATION WORKS 2019

編　　集｜北本 雅久　後庵野 かおり
加藤 早織　山内 花南子

デザイン｜北本 雅久

発　　行｜会津大学短期大学部
産業情報学科 デザイン情報コース
福島県会津若松市一箕町大字八幡字門田1-1
TEL 0242-37-2300（代）　URL http://www.jc.u-aizu.ac.jp/

発 行 日｜ 2019年3月19日

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。

JUNIOR COLLEGE OF AIZU